広島に触れて

多摩市立諏訪中学校　３年　北中　美花

今回、多摩市子ども被爆地派遣事業を通して、広島で平和について考えられた事をとても嬉しく思っています。今まで私は平和について深く考えたことがなく、戦争についても学校で習ったことやテレビで見たこと、知人から聞いたことしか知識がありませんでした。そんな私が広島に行き、何ができるのかも分かっていませんでした。しかし、派遣事業を通して、現地に行かなければわからない戦争の愚かさを学び、平和の尊さを実感することができました。

私が広島を訪れるのは初めてでした。今まで写真や映像でしか見たことがなかった被爆地の様子を実際に自分の目で見ることができました。爆風によって破壊され、無残な姿となって７７年、現代を生きる私たちに今もなお原爆の恐ろしさを訴えかけてくれる原爆ドーム。原爆で犠牲になった子供たちへの想いと、再び原爆によって子供たちが犠牲になることのないようにという人々の願いが込められた平和の子の像。戦後二度と同じ過ちを繰り返さないと誓い、世界平和の実現を祈願する広島の心を刻んだ原爆死没者慰霊碑。教科書には載っていない想像を絶する原子爆弾の恐ろしさと、被爆者の苦しみを知ることができる数多くの資料館。被爆者による嘘偽りのない被爆体験講話。すべてに私の知らない世界が広がっていました。実際に当時の景色が目に浮かぶようにあまりにも無惨で、残酷で、どれだけの人が命を落とし、未来と希望を失ったのかを考えるだけで胸が締め付けられました。

現地で参列した平和記念式典では、夢の中にいるような不思議な感覚に襲われたのを覚えています。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により参列者が制限される中でも、２８５４人にも及ぶ様々な国籍の人々が広島に訪れ、戦争について関心を持ち、平和を尊んでいました。日本だけでなく世界中の人々が平和を願い、黙とうを捧げている姿がとても印象に残っています。これは、平和都市、広島ならではの光景で、東京では感じることのできない雰囲気の一つだと思います。式典での平和宣言や平和への誓いでは、ひとつひとつの言葉の重みから、「戦争を起こしてはいけない、忘れてはならない」という戦争被爆国の訴えを感じることができました。

終戦から７７年が経ち、被爆者の高齢化が進み、戦争を知らない世代が増えてきています。そして、原爆の恐ろしさやあの悪夢のような悲惨な光景が忘れられつつあるのも現状です。今も世界では戦争におびやかされている人たちがいます。日本も一歩間違えてしまえば同じ過ちを繰り返してしまうかもしれません。今回、広島を訪れて、今まで漠然としていた戦争への思いや恐怖が鮮明になりました。平和はやってくるものではなく、創るものです。現代を生きる私たちには、より平和な世界を創っていく役目があります。しかし、平和は一つの世代が創ったとしても、その次の世代に受け継いでいけなければ意味がありません。７７年前から日本では平和のバトンを受け継いできました。次の世代に平和のバトンを繋ぐ力をつけるためにも、私たちは戦争について学び、平和について考える必要があります。私はまだ、本当の平和のあり方がどんなものなのか言葉で言い表すことができません。いつか本当の平和とは何かわかるその時まで平和のバトンを繋ぎ続けていきたいです。